

70歳、実習生入れて規模維持、 実習生なしは後継者なし

J A多古町 大和芋部会(千葉県)

実習生の有無が農業継続か離農かの分岐点になっている。この5年、実習生がどんどん増えた。農業がサステナブルかどうかは土壌や農薬などの問題ではなく、労働力の有無になってきた。全国有数のヤマトイモ産地で、実習生の「効果」を明らかにしたい。

1 ヤマトイモの有名産地 高所得農家の増加

千葉県香取郡多古町を訪問した。成田空港の隣(東側)である。関東ローム層の肥沃な大地が広がり、農業が盛んである。香取郡は農家の高齢化とともに、この5年、実習生が増え、県内では旭市に次いで実習生の多い地域だ。

(注) 悠久の歴史がある多古町も農業生産力が低下してきている。J A多古町園芸部会の出荷金額は1989〜2003年度は30億円前後あったが、04年以降は25億円に減少している。農家の高齢化の影響と見られる。

多古町は弥生時代から稲作が盛ん

である。水田は粘土質なためコメ作りに適し、江戸時代には幕府への献上米であった。現在も、「多古米」(品種コシヒカリ)は地域ブランド米として有名で、多古米の袋を他産地が使った偽物も出回っている。日本のコメ作り百選にも選ばれた(全中・日本農業新聞選定、1990年)。町の中心を栗山川が縦断するように流れ、両脇は水田が広がっている。

台地の畑は、ヤマトイモ(イチモウイモ)、カンシヨ、ニンジン、ダイコンなどの根菜類が栽培されているが、多古のヤマトイモは全国的に有名である。今年1月21日(日)、NHK総合テレビ朝8時25分「うま

いっ!」で「多古町の大和芋」が取り上げられたが、NHKは市場の評判を聞いて取材に来たとのこと。

千葉県内では多古町、千潟町(現在旭市に編入)、香取市、佐倉市がヤマトイモ産地であるが、県産の半分近くは多古産である。関東では群馬、埼玉も産地であるが、群馬は加工用が多い。市場では「多古」が人気がある。自然薯に近い強い粘り(トロ)とほのかな甘みがあり、品質が評価されている。例えば、Aランクで群馬産が2000円のととき、多古産は3000円である。1ケース1000円差である。ブランド化の効果だ。生産量では全国2位、生産金

叶 芳和

1943年、鹿児島県奄美大島生まれ。一橋大学大学院経済学研究科博士課程修了。元・財団法人国民経済研究協会理事長。拓殖大学、帝京平成大学、日本経済大学大学院教授を歴任。主な著書は『農業・先進国型産業論』(日本経済新聞社1982年)、『赤い資本主義・中国』(東洋経済新報社1993年)、『走るアジア遅れる日本』(日本評論社2003年)、『新世代の農業挑戦』新書版(全国農業会議所2014年)など。



14 外国人実習生の現地ルポ 第2回
70歳、実習生入れて規模維持、実習生なしは後継者なし

表1 JA多古町大和芋部会の推移

	会員数	年出荷量
30年前	95人	市場向け 45万ケース (1,800t)
現 状	56人	市場向け 35万ケース
	20人	加工用 3.4万ケース
	(計76人)	(計2,000t)

(注1) 須永和良氏の話及びJA多古町総会資料(2017年度)による
(注2) 市場出しは1ケース4kg、加工用は1ケース20kg
(注3) 30年前は加工用はなかった

額では全国1位らしい。現在、築地、大田、横浜など22の卸市場に出しているが、市場外からも求められている。ネット上の加工野菜の市場からも出荷しないかと誘われている。多古やまと芋は人気があるようだ。現状は供給不足気味である。

近年、ヤマトイモ農業は急速に変わってきた。JA多古町大和芋部会は30年前、会員が95人いた。現在は、市場出し農家は56人である。ヤマトイモは高付加価値であるが、栽培・収穫・出荷に「手間」が掛かる。特に収穫や冷蔵庫コンテナ積みなど、機械化できていない現在の技術体系ではきつい作業である(実習生に言わせると、芋は泥で汚い)。そのた

め、農家の高齢化、後継者不足で、市場出しは56人に減った。労働力のない人は単価の安い加工用向けである。引き続き市場出ししている農家は実習生を入れて労働力を確保しつつ、借地で規模拡大している。

市場出しと加工用は価格が違う。JA多古町の昨年実績で、市場出しは1ケース(4kg)2600円(1kg650円)、加工用は20kg5500円(1kg275円)である。2倍以上も違う。加工用では利益が出ない。もちろん、等級格差があり、市場出しの場合、高いものは3500円、安いものは2000円の価格差がある(注、JA多古町は最上級「A棒」が多いという)。

10a当たり収益は、市場出しの場合、60万〜80万円である。5ha農家の場合、粗収入3000万〜4000万円だ。

JAの大和芋部会長・須永和良氏(60)に取材した。須永氏は現在10haでヤマトイモを栽培し、当地では一番規模が大きい(100%借地)。粗収入7000万〜8000万円(筆者推定)。埼玉県の出身で、父・吉治さんの代から多古に移り、ヤマトイモ栽培を営んでいる。多古町にヤマトイモが導入されたのは約50年前(1960年代)であるが、須永さんの父が伝えたと言われる。(注、千

葉県のヤマトイモ栽培は1940年に佐倉市で始まった)。

収穫は10〜3月、出荷は周年、市場価格を見て出す

ヤマトイモのビジネスは「農協」的ではない。だから、収益率が高い。

ヤマトイモは5月に植え付け、10月中旬から収穫が始まり、3月20日頃までに収穫する。約5カ月間と期間は長い(注、3月20日以降になると、休眠が終わり発芽する)。収穫後は冷蔵庫に保管する(室温2℃)。冷蔵庫のない小零細農家は収穫と同時に出荷する。市場の価格は4〜6月が一番高い。3月までは小規模農家が収穫即出荷するので、供給圧力が強いからだ。(注、冷蔵庫の投資は坪60万円、15坪900万円もするので小零細農家はできない)。

冷蔵庫を保有している農家は、市場の値動きを見ながら、価格が高い時、出荷する。冷蔵庫は保管場所ではなく、投機のための設備投資なのである。彼らはビジネスマンだ。

多古町大和芋部会は11の支部に分かれるが、須永さんは五辻支部に属する。五辻支部は15人から成り、多古町で一番多い。栽培面積は50ha(出



作を含む)。共同選果場を持っている。農協の園芸部会であるから、農協出荷、共販である(注、多古町は共販率が高く、個人出荷は1人。1haの小規模農家で道の駅等に出している)。

しかし、共販であるが、いつ出荷するかは農協ではなく、大和芋部会で決める。市場の値動きを見ながらだ。市場情報を分析し、高値の時、出荷することで、昨年の市場出しは1ケース2600円になった。五辻支部のメンバーは4〜5ha規模に規模拡大しているので、年間粗収入は

3000万〜4000万円と高所得者が多い。

2 実習生入れて規模拡大、実習生なしは後継者なし

五辻支部の共同選果場で、真空パックそして化粧箱詰め作業中の実習生たちに会った。明日から植え付け（マルチ）の仕事と言っていた。単純労働なので、半年あれば、仕事は十分慣れるようだ。

当日の出荷当番の農家が集まっていた。須永さん（10ha、全部借地）は労働力は夫婦+後継者+実習生2人の計5人である。15年前から実習

生を導入した（当時は5ha、中国人1人）。6年前から実習生はタイ人に変わった。その頃から徐々に規模拡大し、2年前に10haになり、実習生2人に増えた。

平山重義さん（5ha、うち自作4ha）は昨年実習生を入れた。一番品質が良いと衆目一致するところだ。秘訣を聞くと、良い種を選んで植え付けているらしい（棒状の太目の形の良いもの）。千本木政春さん（5ha、うち自作1・5ha）も、昨年実習生を入れた。従来、シルバーを雇っていたが、80歳の高齢になったので実習生に変えたのである。



途中から、他支部の作田さん（49歳、4ha）が加わった。筆者に同行していた東日本組合参事末吉氏（先月号参照）に組合加盟、実習生受入れを申し込むためである。母が80歳になった。栽培面積を減らしたくないので、実習生を今年1人、来年1人入れる予定。5年後3人くらいに増やしたいという（6〜7ha目指す）。日本人を雇いたくても、常雇いできる日本人は農村にはいない。シルバーを雇用しているても、80歳になれば限界、そこで、外国人実習生への切り替えが行なわれている。こ

の動きは、この5年間に急速に進んだようだ。

農家が高齢化し、実習生を入れて作付規模を維持したいと考えるようだ。当初は規模維持のため実習生導入のようであるが、そのうち欲が出て、規模拡大に向かっていく。つまり、実習生を入れないと経営の現状維持さえできない。また、実習生を入れて規模拡大する農業経営者がいないと、離農者ばかりで、地域は衰退に向かう。

最近、若い人が実習生を使い始めているようだ。規模拡大目的である。2haの農家が3〜4ha、あるいは4〜5haに規模拡大した。土地は探す気があれば、すぐ出てくる。10a当たり地代は高くて2万円、1万円もあれば、タダの場合もある。先述のように、10a当たり粗収入は60万〜80万円であり、地代コストは極めて小さい。

農本主義が離農を導いた

5ha規模になると、粗収入3000万〜4000万円の高収入になるので、後継者が出る。70歳になり、実習生がいれば農業継続できるが、実習生がいなければ後継者も出ない。実習生の有無が農業継続の分岐点になっている。

農村の現実、高齢夫婦二人で農

業を営んできたが、80歳を超え、限界を超えている産地がある。絶対的に、雇用を入れない限り農業継続できないのが現実だ。

実習生を入れれば、楽になれる、規模拡大もできるといわれても、それを実行しない人はいる。伝統的な家族経営主義から、「雇用」を嫌う哲学の人たちがいる。つまり、その人の哲学がリタイアを選択させているのだ。昔ながらの「農本主義」が強く残っている人たちが離農の道を歩んだ訳である。農業経営についての哲学が原因だ。

「農村は変わった」。これを理解できないと農業はできない。「農家」から「農業経営者」への脱皮が必要なようだ。人を使える「経営力」が必要だ。

五辻支部（15人）は、高齢化が進み、5年後、農家の3分の1は減るとみられている。そして、残った人たちの規模拡大、実習生の増加が続きそうだ。

現状、多古町には約3000人の外国人実習生がいると推定される。共同選果場に集まった農業経営者たちによると、「五辻支部に10数人、隣の支部も10人、ヤマトイモ農家全体では30人いる。カンショ、ニンジン、ダイコンの根菜類はヤマトイモより実習生が多く、一番大きい支部は経

精米施設・農舎・製粉施設・農産物貯蔵施設などに発生する
コクソウムシ、メイガ類、
ハエ類を安全簡単駆除
ネスミの追出し効果抜群!

安全駆除で
虫の混入の
悩み解消!!

サニジェット
SANIJET



駆除効果を体験してください
実演機を無料で貸し出します

人に安全な合成ピレスロイド剤をガス化して施設全体に充満させ、隠れた害虫を追い出し駆除します。月4回程度の定期駆除により害虫に卵の産卵機会を与えません。小型で持ち運び簡単、色々な場所で使用できます

詳しい資料の請求・実演機の貸出
お問い合わせ先

株式会社 アグリ・プラン

TEL 03-5842-3939 Fax 03-6862-4990
東京都文京区本郷3-26-4佐々木ビル〒113-0033
E-mail: aguri_plan2016@ybb.ne.jp

営者80人だから実習生が160人いる(1戸2人)。ハウス農家にもいる。多古町全体では300人くらいいるのではないか。

(注)多古町には不法就労者はいないようだ。しかし、隣の旭市は多いらしい。観光ビザで入国し、当局に摘発されるまで働く。タイ人手配師が日本とタイの両方に居て、日本にいる手配師が仕事を留意して呼ぶ。彼らのコミュニティサイトには、困ったら茨城県の銚田か鹿嶋、あるいは千葉県に駆けつけと書いてあるという(事情通の話)。

2015農林業センサスによると、多古町の農業経営体による「常雇」人数は304人である(表2)。5年で倍増のペースで増えると仮定すると、現在の常雇は約400人である。300人が外国人実習生とすると、常雇に占める実習生の割合は約7割である。

「雇用型農業」が伸びている。表2に示すように、千葉県の農業経営体数は05年6万4325、10年5万5387、15年4万4985と大きく減少している。一方、その間、常雇のいる経営体数は1302、1890、2289と増え、常雇人数は6315、6447、8586と急増した。時代のトレンドは明白である。

3 実習生の実像

共同選果場で、タイ東北部からの実習生3人に会った。写真右からウドムシンさん(30歳、サコンナコン県)、ウッテイチャイさん(33歳、サコンナコン県)、ポンパンさん(22歳、ウドンターニ県)。3人とも水田農家の出身である。実家の水田面積はそれぞれ20~40ライ(3.2~6.4ha)であるが、今の実習先農家とどっちが大きいかわからない。実家の方が大きいとの答えであった。

ウドムシンさんとウッテイチャイさんは日本に来る前、バンコクで働いていた。賃金は月2万円。彼らの賃金は、残業代込みで20万円を超している(基本給15万円+最低賃金868円×1.25×60時間)。実習生は稼得のため残業をしたがる(監理団体は最低40時間以上を要す)、月間60~70時間が時々あるよ



うだ。もちろん、1年中継続してではないから、三六協定上、それは認められる。

なお、日本に来るに際し、彼らは現地の送り出し機関に20万バーツ（約60万円）支払った。（注、ベトナムの相場は120万円）。

実家に送金している。毎月10万円で、多い人は15万円。バンコクで働いていた時は月給2万円だから、大変な大金である。月給20万円貰っているから残るわけであるが、「貯金している？」と聞いたら、否である。どうやらビールやウイスキーが大好きらしい。江戸っ子と同じく宵越しのカネは持たないようだ。町に出て居酒屋ではなく、アパートのなかで飲んでいる。

帰国後のことを聞いたら、ウツティチャイさんは「田んぼ」と答えたが、他の二人はまだ決めてないという。先輩実習生のなかには「トラクターを買うために来た」といって、貯金して帰国、農業に就いた人もいるが、これは例外だ。日本語を覚えて、日系企業に就職したり、観光ビジネスが多いようだ。

日曜日は、部屋の掃除、勉強（技能実習評価試験の受験勉強）、寝る、町に買い物も。日本の社会との交流はない。バンコクでは日曜の休みはなく、楽しい生活はなかったようだ。

表2 千葉県主な市町村の農業雇用

	経営体数	常雇のある経営体	常雇人数
千葉県 2005	64,325	1,302	6,315
千葉県 2010	55,387	1,890	6,447
千葉県 2015	44,985	2,289	8,586
銚子市	1,016	140	296
成田市	1,689	86	403
旭市 2010	2,615	230	940
旭市 2015	2,275	308	1,289
市原市	2,181	53	327
八街市	1,143	82	269
富里市	799	122	372
南房総市	1,999	92	310
匝瑳市	1,503	89	393
山武市	1,821	102	271
香取市 2010	4,247	93	430
香取市 2015	3,406	124	823
多古町 2010	1,224	46	206
多古町 2015	1,021	72	304
東庄町 2010	756	52	161
東庄町 2015	631	72	323
(香取郡)	(1,841)	(152)	(657)

(出所) 農水省「2015 農林業センサス」ほか

日本に長く居たいという。言葉がほとんど通じず、「タイに居た時と今の日本、どっちがいいか」と生活スタイルの比較を聞こうと思ったが、通じなかった。

奥さんがタイ語を習う

共同選果場、パッキング工程に現地人離れた妙齢の女性がいたので「お上手ですね」と声を掛けたら、相手「○×△×△○……」（タイ語らしい）。須永さんの奥さんである。

多分と思いつながら、冷やかし半分で語り掛けたのであるが、相手の方が

役者が上だった。タイ人実習生を入れるようになってタイ語の勉強をしたという。

実習生によると「お母さんはやさしい」という。現地での面接も奥さんが行なったらしい。実習生とのコミュニケーションは良さそうだ。奥さんが明るく、心を開いてくれると、実習生との関係もうまくいく。真面目に働く。農家では奥さんの役割が非常に大きい。

失踪その他、実習生に関して悪いニュースも多いが、ここはそういう問題はなさそうだ。

取材の現地で、日本全体を想った。今後、社会の構成員として実習生の数は増える。休日、日本社会との交流がないままアパートで酒を飲んでいるが、分断されたままでは社会の不安定を生む。共生に向けた社会基盤づくりが必要だ。残業時間を減らしてでも（賃金を高め収入を維持したまま）、共生のための交流や社会教育の時間を増やした方がいいのではないか。教育プログラムの開発が望ましい。「働き方改革」「生き方改革」を実習生にも及ぼすことが大切と思われる。